

そもそも能美郡同行中について、四講ということを始めて、当流の法義の是非邪正も讚嘆すべき興行これある由きこえ候、誠にもつて仏法興隆の根源、往生浄土の支度、殊勝に覚え候

蓮如上人が文明十八年（1486）能美四講（しこう）に宛てた御消息の一部である。当時の小松教区で板津、山上、山内、南組の能美四講が組織されたことがよくわかる。そのころ、本山への志が能美郡全体で年間六〇貫文とされ、そのうち板津組が五〇貫文を負担していと伝えられている。

板津地区の成り立ちは鎌倉

大寄あよし小寄

宗派 大松教務所

〒923-0904

小松市小馬出町26

Tel 0761-22-0555

発行者 長澤 秀豊

編集 小松教区教化委員会

あり、世話方が育ちにくくいう問題を抱えている。しかし、根上地区では組御講が途絶えても、「根上講」が引き継がれていて、町内の他宗旨の方の参加も見られるることは嬉しいことである。

小寄りめぐり⑯

板津組

板津組組御講の御消息は、あつた板津成景（しげかげ）が、能美郡の三角州の板津邑（むら）（現在の御館町付近）に居住し、読の際、参加者が御消息のお心に触れ、開山聖人の真宗の正義を理解していくため、印刷したものに目を通して聞いていただいている。

時代にさかのぼる。国の役人で、あつた板津成景（しげかげ）が、能美郡の三角州の板津邑（むら）（現在の御館町付近）に居住し、読の際、参加者が御消息のお心に触れ、開山聖人の真宗の正義を理解していくため、印刷したものに目を通して聞いていただいている。

明治十九年十二月、嚴如上人頭に任命された。治めた地域を板津荘といい、四十六ヶ所が含まれていたと伝えられている。

板津地区に伝えてきた先達の世話方の積極的な声かけもあり、たくさんの参加者があった。地域に伝わる信仰への思いを改めて感じることができた。

板津地区に伝えてきた先達の思いを未来に伝え、また法義相続・本廟護持の精神を伝えたいのだ。



組御講の様子（山口町会館）

郡中御影の歴史

しげのい ひかる
称佛寺 滋野井 光

年前に起つた「任誓（にんせい）」事件に遡る。

能美郡二曲村（現白山市出合町）に与三郎という少年が居た。寺院の生まれではなかった

能美郡門徒と郡中御影

郡中御影報恩講の歴史について、実は具体的なことはよくわかつていません。ただ、御影を巡つて江戸時代中期に旧小松町で起つた大きな騒動については、かなり詳細な記録が残されています。「寺庵（じあん）騒動」とよばれるこの出来事の経緯を見ることで、郡中御影とそのお講がいかに能美郡の人々から篤く仰がれていたかを知ることがで

会を与えられた。やがて本山の学僧も一目置くほどの人物となり、任誓という名で知られるようになる。

二曲に帰つて村々のお講で法談する任誓は、たいそうな人気であったという。しかしその人はを妬む僧侶たちから「異安心」のそしりを受け、挙げ句、本山で審問を受けることになります。ところが堂々の受け答えに、一言一句誤りなし」のお墨付きを得て、かえつて能美郡の僧侶がお叱りを受けることにな

った。それでも結局任誓はこの後いくつかの罪を被せられて獄死することとなる。一七二四年（享保二）年のことであつた。

任誓没後もその遺徳を偲ぶ人々の意識は強い連帶を持ち、

藩による寺院統制には組み込まれない勢力があつた。その連帶の核になったのが郡中御影とそのお講である。

寺庵騒動以前

郡中御影は御役仲間と言われる六カ寺（勧帰寺、勝光寺、称名寺、本覚寺、本光寺、本蓮寺）により、一年ごとの当番制で保管されていました。毎月二十五日の勤行、三月二十五日のお講、そして八月二十一日から二十五日までの報恩講が当番の寺院で勤められていました。他にも郡内の各村に御影が出向してお講が勤められたり、同行の葬儀に奉懸されたりして、強い連帶意識の門徒体制が培われた。

一方、寺社奉行による寺院管理体制も敷かれるようになつており、触頭（ふれがしら）としてその責任を負っていたのが本蓮寺であった。本蓮寺は郡中御影を核とする門徒体制と国法による体制の二重化を問題視

本山の指示によって金沢別院まで御影を運び出そうとしたのが一七七〇（明和七）年の二月七日。それまでに小松に集合していた白山麓十八カ村の人たちが、六日午後八時頃から本蓮寺やそれに同調する長圓寺などの寺院と門徒宅を次々と打ち壊した。鉄砲の音が響くなど、たいそうな騒動があつたという。



騒動の顛末

し、その解消のため郡中御影を本山に返上する策を立てた。しかしこの策は本蓮寺以外の五カ寺の賛同を得られず、また門徒衆の知るところとなつて非常に険悪な空気が郡内に漂うことになつた。

翌日この騒動は収束したが、後日本蓮寺は触頭を解かれるなどの厳しい処置があった。また本山の命により、郡中御影は当番寺院の勧帰寺が一時的に預かり、やがて永代に保管することとなつた。さらに御影を掲げてのお講が禁止されたので、郡中御影報恩講は長きにわたつて途絶えることとなる。改めて六カ寺が結束して本山に願い出て、郡中御影報恩講が復活したのは一八七六(明治九)年のことであり、騒動から百年の時が流れていた。

大坊を打ち壊してでも御影を渡すまいとした郡中門徒の強い思いが、この寺庵騒動の顛末から知られるのである。

※この稿を記すにあたり、『農民鑑』(能美の土徳 任誓)、『(九日講組門徒会刊)』、『烏兎記』(称名寺刊)、『勧帰寺史』、『本覚寺史』、『本蓮寺史』等を参照させていただきました。謝して付記させていただきます。

本山和敬堂へ お内仏を寄進

十二日講門徒会43名が
上山 入仏式勤まる

昨年7月3日、新施設和敬堂で、十二日講門徒会(中田郁夫会長)が寄贈したお内仏の入仏式が執り行われ、同会から43名が上山、参拝しました。

同朋会館では、お内仏のお仕を学ぶ部屋が不足していたことから、その課題に対応するため新施設において増室することになりました。これを受け、真宗本廟奉仕施設建築委員会委員長でもある中田郁夫さんが、小松教区十二日講門徒会からのお内仏の寄贈を提案されました。

郁夫会長が寄贈したお内仏は東孝英さんから十二日講門徒会へ寄贈されたもので、一旦教務所に安置され、新施設和敬堂の完成を待つていました。

入仏式当日は、お内仏を安置する和敬堂声明作法室において行われ、東さんによる御本尊奉掲の後、お莊嚴を整えたお内仏の前で、同朋唱和によるお勤めを行いました。

続いて、但馬弘宗務総長より十二日講門徒会と東さんへ感謝状が授与され、「小松において大切に崇敬されてきたお内仏を寄贈いただき、誠に有難い。今後はこのお内仏の由緒を語り伝えるとともに、これまで大



写真右から 中田郁夫さん
牧口公衛さん 東孝英さん



感謝状を受け取られる東さん



切に崇敬されてきたお志を受け継ぎ、全国の御同行と共に末永く崇敬護持してまいります」と御礼が伝えられました。お内仏は、螺鈿細工などが施された県伝統工芸・美川仏壇によるものです。本廟奉仕や住職修習、研修会など、声明作法を学ぶ場として、今後様々な用途で活用されることとなります。

【教区教化事業のご案内】

◆十二日講

日時 每月12日

午前9時半

会場 常磐会館（小松教務所）

講師【4月】伊藤俊作氏

◆日曜講座

日時 日曜日午前9時半

【4月】15日・22日

【5月】20日・27日

【6月】3日・24日

会場 常磐会館（小松教務所）

◆4月

2日 真宗本廟春の法要

教区団体参拝

4日 教区花まつり

会場 勸歸寺・常磐会館

21日 教区推進員連絡協議会

「バス研修旅行」

◆5月

17日 社会問題研修会①

講師 山下憲昭氏（大谷大学教授）

会場 常磐会館
19日 社会教化研修会①

講師 鶴見晃氏（教学研究所所員）

会場 常磐会館
※各種詳細につきましては、小松教務所までお問い合わせください

花まつりで配られるお菓子は白象のおなかから出てくるので大人気！

遠州山勝圓寺と聞くよりも「なかよし幼稚園」といった方が小松市内の皆さんには馴染みがあるかもしれない。かつて八日市町にあった寺院は、一一向一建築。現住職の遠州賢氏は19代勤めながらお寺の将来を見据え、幼稚園の建設を決意した。

目。

17代住職が、小松教務所に

勤めながらお寺の将来を見据

え、幼稚園の建設を決意した。

遠州山勝圓寺と聞くよりも「なかよし幼稚園」といった方が小松市内の皆さんには馴染みがあるかもしれない。かつて八日市町にあった寺院は、一一向一建築。現住職の遠州賢氏は19代勤めながらお寺の将来を見据え、幼稚園の建設を決意した。

月曜日は必ず本堂にて朝礼。畳の上での正座、挨拶、礼儀。なかなか若い世代の住宅事情では教えられないことを子どもたちは学ぶことができる。『正信偈』も、ふりがなを見て濁音や読みづらい言い回しを読みこなし、漢字に触れている。絵本では決して味わえない学びである。園長先生でもある現住職は、折りにふれ、仏様の教えを子どもたちにお話しているところ。人として大切なことも「おしゃかさまは……」と、教えに照らしてお話しするそうだ。

今年4月から認定保育園と

勝圓寺 shōyūenji

（小松市大領町）

その頃、日本はちょうど団塊世代ジニアのベビーブームであった。昭和42年、18代住職のときに、仏様の教えを子どもたちへという願いを込めて、「なかよし幼稚園」を設立。今年で創立50年を迎える。決して大きな

幼稚園ではないが「家庭の雰囲気を残しつつ、集団生活を学べる場所」として理念が掲げられ、園児一人ひとりによく目が届く。

月曜日は必ず本堂にて朝礼。畳の上での正座、挨拶、礼儀。なかなか若い世代の住宅事情では教えられないことを子どもたちは学ぶことができる。『正信偈』も、ふりがなを見て濁音や読みづらい言い回しを読みこなし、漢字に触れている。絵本では決して味わえない学びである。園長先生でもある現住職は、折りにふれ、仏様の教えを子どもたちにお話しているところ。人として大切なことも「おしゃかさまは……」と、教えに照らしてお話しするそうだ。

して、1歳児からの受け入れを開始する。小松市は意外に1歳児の待機児童が多い。地域の保育の現状や願いに即応して、創立50年の節目に大きく前進し挑戦していくこととなる。お

参りをする場としてだけではなく、子供たちの笑い声が境内に響く教育の場としてのお寺。4月8日おしゃかさまの誕生日には今年の新入園児を迎える。



毎週本堂での子どもたちのお参りの様子

編集後記（大寄小寄の編集作業は多くの時間かかります・幹事を筆頭に実行委員のより良い紙面に一生懸命取り組む姿には本当に頭が下がります・今年度より広報部門の一員になります・少しでもお手伝いが出来ればと依頼をさせていただきます・どうぞよろしくお願いいたします！ 中田